

お口爽やかですか

テーマ むし歯予防にも社会や行政の責任がある

行政がむし歯の予防対策を怠ることは「児童虐待」と考えませんか

昨年、小学校5年生の少女が母親に連れられて来た。診療台に上げて、その子に口を開けるように言っても、なぜかいやがって開けてくれない。20分以上も押し問答の末、泣き出しそうになりながらようやく見せてくれたのが、写真のような口の状態であった。私は思わずアツと驚きの声を上げそうになった。予想していたよりも事は重大であったからである。これは家庭だけの問題ではない。

すでに数カ月も前から、彼女の前歯は上下ともむし歯が進行して、歯の一部が欠けて崩壊していた状態であったという。最近、むし歯が神経に到達して水を飲むたびに激痛が走り、いよいよ痛みが止まらなくなり夜も寝られなく来院したの

である。

友達の前で口を開けるのも、笑うことも出来なかったのではないかと、容易に想像できる。時には「いじめ」や仲間はずれの原因になったのではないかと、少女の無念さを思うと心が痛んだ。

思い起こせば30年前、別の炭鉱町にあった歯科診療所に勤務していた時代以来の衝撃であり、歯科医師としての悔恨があった。

健康格差は、時には「いじめ」の原因に

このようなむし歯の発生は、国がガイドラインを出して普及に努めるむし歯予防法「週1回1分間のフッ化物洗口」を学校で実施すること、大半は避けるこ

とが出来る。

しかし、2003年に国が都道府県知事に通達したガイドラインは、いまだ通達されていない学校がある聞く。長年の関係者の怠慢のつけを、この少女は受けているのだ。これは、当然するべき対策を取らない「不作為の罪」にあたるという、強い非難が出て当然である。

みんながかかりやすい「むし歯予防」は社会や行政の責任

無論、旭川市は人口約36万人の大都会、いろいろな家庭の子供がいるのは当たり前である。しかし、みなで防ぐ手段があるのなら、子供や市民に健康格差があってはならない。

アメリカ「ヘルシーピー

ブル2010」で、第一に「健康寿命を延ばす」、第二に「健康格差をなくす」を目標に上げている。この少女のような悲劇を生まないためにも、教育委員会や行政が責任を持ち、みんながかかりやすい「むし歯」を予防し、「むし歯格差」をなくす努力を社会全体がして欲しいものである。治療は万能ではないのであるから。

